様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７５０３７７

研究課題名（和文）発達とアタッチメントから考えるニート・ひきこもりへと至るプロセス

研究課題名（英文）A developmental pathway to become NEET/HIKIKOMORI based on shyness/social withdrawal and attachment theory

研究代表者
中尾　達馬（NAKAO, Tatsuma）

琉球大学・教育学部・准教授

研究者番号：４０３８０６６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、Rubin et al.(2003)のモデルに基づきながら、ニート・ひきこもりへと至る道筋を精査することであった。調査の結果、(1)日本では、シャイであるほど、恋愛開始年齢は遅くなるが、結婚や第一子誕生、そして安定した職業に就く年齢が遅くなることはないこと、(2)小学生と大学生では、社会関係からの撤退傾向が、中・高校生では、シャイネスが、ニート・ひきこもり経験者では、見捨てられ不安が、非社会性関連変数（孤独感、生活満足度、対人不安傾向）と関連しやすいこと、が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to reveal the developmental pathway to become NEET/HIKIKOMORI based on Rubin et al. (2003)’s model. As results of my researches, (1) The more people in their 30’s had a tendency of shyness, the later they had been for engaging in romantic relationships (However, this tendency was not related the age of marriage, getting first child, and getting stable job). (2) Asocial-related variables (loneliness, life satisfaction, and social anxiety tendency) were related social withdrawal tendency in elementary school kids and university students, shyness in junior high school and high school students, and attachment anxiety in people with experience of NEET/HIKIKOMORI.

研究分野：発達心理学

キーワード：ひきこもり　ニート　社会関係からの撤退　シャイネス　非社会性　アタッチメント　発達

１．研究開始当初の背景

非社会性の問題は、攻撃性や非行といった反社会性の問題に比べて、目立たないし、人に迷惑をかけないため、近年まで、注目を浴びることは少なかった（Rubin & Coplan, 2004；藤岡，2013）。だが、欧米では、社会関係からの撤退（SW: social withdrawal）やシャイネス（shyness）が内向型の不適応問題へとつながることが指摘され、日本では、社会的ひきこもり（以下、ひきこもりと略す）やニート（NEET: Not in Education, Employment, or Training; 就学、就労、職業訓練のいずれも行っていない若者）が大きな社会問題となっている。

一般的に、ひきこもりと SW は、別概念だと見なされてきた（Teo, 2010）。実際、ひきこもりは、「20 代後半までに問題化し、6 ヶ月以上、自宅にひきこもって社会参加をしない状態が持続しており、ほかの精神障害がその第 1 の原因とは考えにくいもの」（斎藤，1998）と定義されている。そして、SW は、「場所や時間に関係なく、また見知っている、見知らないを問わず仲間に出会ったときに、孤立行動を一貫して取ること」（Rubin, Burgess, Kennedy, & Stewart, 2003）と定義されている。つまり、欧米で言う SW の子どもとは、「シャイで一人でいて、あまりしゃべらない子」、すなわち、引っ込み思案な子であって、自宅にひきこもっている訳ではない（外出はするし、他人と話もする）。なお、本研究では、中尾・髙橋・数井（2012）や中尾（2016）と同様に，ニートも社会参加できていないという意味で、「社会的」ひきこもりの一種とみなす。

だが、実は、ニート・ひきこもりと SW を別概念だと見なしたことで、発達的視点から、非社会性の問題を連続的に捉えるという試みがほとんどなされなくなってしまった。言い換えると、ニート・ひきこもりの青年・家族を支援する際に、その原因を探っても解決につながらないことが多いため、発達的視点から予防策を提言するという試み自体が皆無になってしまった。その結果、ニート・ひきこもりの問題は、放置しても解決せずに長期化するにもかかわらず、「待つ」という支援だけが行われ、当事者の多く（約 40%）が「不登校→ニート・ひきこもり」という悪循環・長期化のサイクルに陥ってしまった可能性がある（中尾ほか 2012，中尾, 2016）。

だが、逆に、ニート・ひきこもりを、SW を含めて発達的に見る、アタッチメント的に見ると、先のような負の連鎖を断ち切れる可能性が高い。つまり、本人を変えようとするばかりではなく、家族・教師・クラスメイトといった周りを変えることで、本人を支えるシステムを作り、この連鎖を断とうとするのである。そして、その際には、本人やその周りにいる人の「不安や恐れ」を如何に取り除くのか、ということが肝要であるという援助の方向性・指針を明確に示すことができる。

また、一般的に、ひきこもりの問題には、解決までに約 10 年の年月を要するといわれている。そのため、できるだけ、早い時期から予防策・介入策を導入すれば、後の発達段階において非社会性の問題を静穏化させ、社会参加を模索しやすくなる。さらに述べると、ニート・ひきこもりの支援の現場では、「不登校」「高校中退」「ニート」「ひきこもり」という形で、問題発生後の介入・フォローアップを重視する傾向がある。そのため、問題発生前からの予防策の提案は重要である。その際には、アタッチメントの視点を加えることで、「不安や恐れ」の低減という視点から情報を整理し、十分な予防策ではなく、実現可能性が高い最低限必要な予防策を提供できるようになるという効果が期待できる。

２．研究の目的

本研究の目的は、「発達的視点」「アタッチメント（愛着）」「SW」「シャイネス」という 4 つのキーワードから、ニート・ひきこもりへと至る道筋を精査し、その予防策・介入策を提案することである。なお、本研究では、非社会性について、「SW」を社会関係から撤退する傾向（詳細な定義は前述）、「シャイネス」を「恥ずかしいと思い一歩目を踏み出せない傾向（社会的変化場面における行動抑制傾向）：社会的新奇性に直面したときにそれを警戒する傾向、あるいは社会的評価を受けると思う状況における人目を気にする傾向」（Rubin & Coplan, 2010 小野訳 2013）、「内向性」（外向性の逆）を「思考が自分の内面に向きやすい傾向）と操作的に定義する。つまり、これらのかなり類似した概念を、思考が自分の内面に向きやすい人（内向的な人）が、人とのかかわりを躊躇したり（シャイネス）、あるいは、既にある社会関係から撤退したりする（SW）と区別して捉えている。

３．研究の方法

本研究は大きく分けて、6 つの研究から構成されている。

(1) 安定したアタッチメントはキャリア発達の促進因となり得るのか？
(2) ニート・ひきこもり経験者に特徴的な心理過程の探索
(3) シャイな人は恋愛の開始や婚期が遅れるのか？
(4) 大学生や教員（小学校、中学校、高校）は、「恥ずかしがり屋」「非社会的な子ども」「ニート」「ひきこもり」をどのように捉えているのか？：周りの人の認識
(5) 短縮版尺度作成：(6)の予備調査であり、アタッチメントおよびシャイネスについて、フルバージョンと短縮版（簡易版）尺度との関連性を検討した。この過程において、児童期におけるアタッチメント尺度の妥当性検討として、母親のスーパーヴァイズ機能と児童のアタッチメント

の安定性との関連性について調査を実施した。

(6) 小学 4 年生から大学 4 年生，そしてニート・ひきこもり経験者を対象とした横断的研究

以下では、このうち、(2)(3)(6)について、研究成果の報告を行う。

４．研究成果

「(2) ニート・ひきこもり経験者に特徴的な心理過程の探索」の目的は，ニート・ひきこもりと密接な関連があると想定される「孤独感」「対人恐怖」（対人的過敏さ、対人緊張度）「精神的健康」「適応」（居心地の良さの感覚）を取り上げ、これらの変数に対して、一般他者および母親へのアタッチメント、そしてシャイネス・SW が与える影響を明らかにすることであった。なお、その際には、概念的な混乱が予想される「シャイネス」「SW」「内向性」（外向性）の異同を明確にすることも試みた。

大学生 441 名（平均年齢 21.5 歳：男性 207 名、女性 237 名）を対象に、以下の 9 つの尺度を実施した。

① ECR-GO20（見捨てられ不安、親密性の回避：中尾・加藤，2004)、20 項目（項目の選択は金政（2007）による)、7 件法
② （母）親へのアタッチメント尺度（アタッチメント不安、アタッチメント回避：丹羽，2005)、17 項目、7 件法
③ 特性シャイネス尺度（特性シャイネス：相川，1991)、16 項目、5 件法
④ SW 尺度：CBCL（Achenbach，1991）の「Withdrawn scale」から Booth-LaForce & Oxford (2008) に基づき 4 項目を抜粋し、CBS（Ladd & Profilet，2006）の「Asocial with Peers」から抜粋した 3 項目と共に実施した。
⑤ 外向性（和田，2006)、12 項目、7 件法
⑥ 改訂 UCLA 孤独感尺度（諸井，1992)、20 項目、4 件法
⑦ 短縮版対人恐怖的傾向尺度（過敏さ・劣等感、緊張感・圧倒感、相澤，2009)、13 項目、7 件法
⑧ GHQ12（中川・大坊，2013)、日本文化科学社の許可を得て実施、12 項目、4 件法
⑨ 大学生用適応感尺度（居心地の良さの感覚：大久保・青柳，2003)、7 項目を抜粋し使用、5 件法

一般他者および母親へのアタッチメント、シャイネス、SW、外向性を独立変数とし、孤独感、対人恐怖傾向、精神的健康、適応度を従属変数とする重回帰分析を行った（Table 1、Table 2)。その結果、全ての指標において、「見捨てられ不安」と「SW」が有意に関連し、対人恐怖傾向については、さらに、母親への「アタッチメント回避」や「シャイネス」が有意に関連するというパターンが見出された。また、これらのパターンからは、シャイネス、SW、内向性は、異なる概念であることも示唆された。

したがって、ニート・ひきこもりへと至る道筋としては、不安定なアタッチメントが (1)SW と関連することで孤独感や居心地の悪さ、精神的不健康、対人的過敏さへとつながる道筋と、(2)シャイネスと関連することで、対人恐怖へとつながる道筋の 2 通りがある可能性が示唆された。なお、母親へのアタッチメント回避（不信感）が、対人恐怖傾向とのみ関連性を持つことは興味深い。

Table 1 アタッチメント、シャイネス、SW と孤独感、適応感に関する重回帰分析結果（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		改訂 UCLA 孤独感尺度	大学生用適応感尺度
尺度名	下位尺度	孤独感	居心地の良さの感覚
ECR-GO20	見捨てられ不安	.17**	-.17**
	親密性の回避	.05	-.13*
母親への愛着尺度	愛着不安	.07	.02
	愛着回避	.06	-.03
ビック・ファイブ尺度	外向性	-.19**	.20*
特性シャイネス尺度	シャイネス	.08	-.03
SW 尺度	SW	.45**	-.27**
R^2		0.61	0.36

注）外向性は逆転集計すると内向性である** p<.01、* p<.05

Table 2 アタッチメント、シャイネス、SW と精神的健康、対人恐怖傾向に関する重回帰分析結果 2（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		GHQ12	短縮版対人恐怖傾向尺度	
尺度名	下位尺度	精神的健康	過敏さ・劣等感	緊張感・圧迫感
ECR-GO20	見捨てられ不安	.37**	.57**	.30**
	親密性の回避	-.06	-.03	-.06
母親への愛着尺度	愛着不安	.05	.07	.02
	愛着回避	.02	-.10**	-.10**
ビック・ファイブ尺度	外向性	.04	-.08	-.11
特性シャイネス尺度	シャイネス	.03	.14*	.50**
SW 尺度	SW	.23**	.17**	.00
R^2		0.21	0.58	0.55

注）GHQ12 は、得点が高いほど、精神的には不健康である。外向性は逆転集計すると内向性である。** p<.01、* p<.05

「(3) シャイな人は恋愛の開始や婚期が遅れるのか？」の目的は、「8～10 歳のときにシャイであった男児は、そうでない男児に比べて、3 年遅く結婚し、4 年遅く父親になり、3 年遅れて安定した職業につく」という先行研究（Capsi, Bem, Elder, 1988；Kerr, Lambert, Bem，1996）を踏まえて、シャイな日本人男性ほど、恋愛開始、結婚、第一子誕生、安定した職業に就いた年齢が遅いかどうかを明らかにすることであった。

インターネット調査会社マクロミルが保有するモニターの中から、30 歳から 39 歳の社会人 412 名（平均年齢 34.88 歳、男性 206 名、女性 206 名、未婚者 187 名、既婚者 206 名、離婚経験者 19 名）を対象に、以下の 4 つの尺度を実施した。

① ECR-G020、20 項目、7 件法
② シャイネス尺度（対人不安傾向、対人消極傾向：菅原，1998）、16 項目（「入社の面接を受けるときには緊張する」は削除して実施）、5 件法
③ TIPI-J（外向性、小塩・阿部・カトローニ ピノ, 2012）、2 項目、7 件法
④ 初婚、恋愛開始、第一子誕生、安定した職業についた年齢に関する質問（単一項目式）：「あなたは何歳のときに結婚しましたか（初婚）」「中学卒業後の、はじめて恋人（交際期間 1 ヶ月以上）ができた年齢を教えてください」「第一子が生まれたとき、あなたは何歳でしたか」「あなたが、安定した職業に就いたのは、何歳のときでしたか」

初婚年齢は、男性 28.2 歳、女性 27.3 歳、恋愛開始年齢は、男性 18.4 歳、女性 18.1 歳であった。第一子誕生と安定した職業に就いた年齢については、有意な性差があり、第一子誕生については、男性 30.0 歳、女性 27.3 歳、安定した職業に就いた年齢については、男性 23.4 歳、女性 21.9 歳であった。

アタッチメント、シャイネス、SW、外向性（内向性）との関連性については、男女とも、基本的には「恋愛開始年齢」とのみ有意な関連性が得られた（Table 3、Table 4）。したがって、欧米とは異なり、日本では、シャイであるほど、恋愛開始年齢は遅くなるが、結婚や第一子誕生、そして安定した職業に就く年齢とは、基本的に関連性がないことが示唆された。

Table 3 アタッチメント、シャイネス、SW と「年齢」との相関係数（男性）

尺度名	下位尺度名	初婚	恋愛開始	第一子誕生	安定した職業
ECR-G020	見捨てられ不安	-.02	-.00	-.08	.02
	親密性の回避	-.11	.11	-.19	-.03
シャイネス	対人不安傾向	.04	.26**	-.01	.09
尺度	対人消極傾向	-.01	.28**	-.12	.01
SW	SW	-.03	.23**	-.16	-.05
TIPI-J	外向性	-.07	-.32**	.04	-.04

注）*p<.05, **p<.01

Table 4 アタッチメント、シャイネス、SW と「年齢」との相関係数（女性）

尺度名	下位尺度名	初婚	恋愛開始	第一子誕生	安定した職業
ECR-G020	見捨てられ不安	-.05	.07	-.11	.04
	親密性の回避	-.07	.27**	.09	-.07
シャイネス	対人不安傾向	-.07	.26**	-.02	-.03
尺度	対人消極傾向	-.05	.41**	-.01	-.10
SW	SW	-.08	.33**	.01	.04
TIPI-J	外向性	-.05	-.38**	.00	.04

注）*p<.05, **p<.01

「(6) 小学 4 年生から大学 4 年生，そしてニート・ひきこもり経験者を対象とした横断的研究」の目的は、「(2) 大学生調査 2：ニート・ひきこもり経験者に特徴的な心理過程の探索」を、小学 4 年生から大学 4 年生、そしてニート・ひきこもり経験者に対して実施し、ニート・ひきこもりへと至る道筋の一端を明らかにすることであった。計 1,004 名（男 443 名、女 71 名、Table 5）を対象に、以下の 6 つの尺度を実施した（全て 4 件法）。

Table 5 調査対象者の内訳

	小 4	小 5	小 6
男	28	41	39
女	42	44	36
	中 1	中 2	中 3
男	18	21	28
女	27	19	25
	高 1	高 2	高 3
男	27	21	23
女	28	25	19
	大学 1	大学 2	大学 3	大学 4
男	84	48	16	10
女	103	89	82	25
	ニート・ひきこもり経験者			
男	29			
女	7			

注）ニート・ひきこもり経験者におけるひきこもり期間は、全体で 5.5 年（range=0.4~19 年）、最長期間 4.3 年（range=0.4~17 年）であった。

① 母親版 ECR-RC9（見捨てられ不安、親密性の回避：中尾・数井・村上，2016）、9 項目
② 児童期・思春期シャイネス尺度（シャイネス：菅原・酒井・眞榮城・菅原・木島・詫摩・天羽，2000）、6 項目
③ SW 尺度（SW 傾向、同上）、7 項目
④ 短縮版孤独感尺度（孤独感：井上・高橋，2000）、5 項目
⑤ SLSS（生活満足度：吉武，2010）、7 項目
⑥ 児童用対人不安傾向尺度（否定的評価懸念、情動的反応性：松尾・新井，1998）、13 項目

全体および各校種について、母親へのアタッチメント、シャイネス、SW 傾向を独立変数とし、孤独感、生活満足度、対人不安傾向を従属変数とする重回帰分析を行った（Table 6～11）。その結果、全体的な傾向としては、(1)見捨てられ不安や SW 傾向は孤独感へつながること、(2)中学生以降では、親密性の回避が低くなると、生活満足度が高まること、(3)中学生以降では、見捨てられ不安やシャイネスは否定的評価懸念へとつながること、(4)シャイネスが高いほど、情動的反応性が高いこと（人前で顔があつくなる、どきどきする）が示唆された。また、校種別の特徴としては、(5)小学生と大学生においては、SW 傾向が、中学生や高校生においては、シャイネスが、ニート・ひきこもり経験者においては、見捨てられ不安が、非社会性関連変数（孤独感、生活満足度、対人不安傾向）と関連しやすいこと、が示唆された。

Table 6 全体における重回帰分析結果（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		短縮版孤独感尺度	SLSS	児童用対人不安傾向尺度	
尺度名	下位尺度	孤独感	生活満足度	否定的評価懸念	情動的反応性
母親版	見捨てられ不安	.10 **	-.06	.16 **	.09 **
ECR-RC9	親密性の回避	.11 **	-.28 **	.02	-.04
児童期・思春期シャイネス尺度	シャイネス	.13 **	-.15 **	.33 **	.53 **
SW 尺度	SW	.44 **	-.19 **	.18 **	.14 **
R^2		0.35 **	0.23 **	0.25 **	0.37 **

注）** p<.01、* p<.05

Table 7 小学生における重回帰分析結果（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		短縮版孤独感尺度	SLSS	児童用対人不安傾向尺度	
尺度名	下位尺度	孤独感	生活満足度	否定的評価懸念	情動的反応性
母親版	見捨てられ不安	.15	-.18	.04	.04
ECR-RC9	親密性の回避	.07	-.19	.16	.08
児童期･思春期シャイネス尺度	シャイネス	-.01	-.06	.17	.51 **
SW 尺度	SW	.44 **	-.34 **	.28 *	.13
R^2		0.20 **	0.19 **	0.14 **	0.30 **

注）** p<.01、* p<.05

Table 8 中学生における重回帰分析結果（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		短縮版孤独感尺度	SLSS	児童用対人不安傾向尺度	
尺度名	下位尺度	孤独感	生活満足度	否定的評価懸念	情動的反応性
母親版	見捨てられ不安	.17 *	-.14	.29 **	.18 **
ECR-RC9	親密性の回避	.07	-.32 **	-.12	-.13 *
児童期･思春期シャイネス尺度	シャイネス	.19 *	-.26 **	.48 **	.61 **
SW 尺度	SW	.44 **	-.13	.15	.12
R^2		0.38 **	0.30 **	0.41 **	0.49 **

注）** p<.01、* p<.05

Table 9 高校生における重回帰分析結果（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		短縮版孤独感尺度	SLSS	児童用対人不安傾向尺度	
尺度名	下位尺度	孤独感	生活満足度	否定的評価懸念	情動的反応性
母親版	見捨てられ不安	.29 **	.05	.24 **	.09
ECR-RC9	親密性の回避	-.04	-.22 *	-.13	-.16 *
児童期･思春期シャイネス尺度	シャイネス	.23 **	-.16	.26 **	.38 **
SW 尺度	SW	.09	.05	.17	.24 *
R^2		0.17 **	0.04 *	0.19 **	0.26 **

注）** p<.01、* p<.05

Table 10 大学生における重回帰分析結果（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		短縮版孤独感尺度	SLSS	児童用対人不安傾向尺度	
尺度名	下位尺度	孤独感	生活満足度	否定的評価懸念	情動的反応性
母親版	見捨てられ不安	.14 **	-.06	.09 *	.05
ECR-RC9	親密性の回避	.07	-.19 **	.04	-.01
児童期･思春期シャイネス尺度	シャイネス	.07	-.04	.29 **	.58 **
SW 尺度	SW	.45 **	-.26 **	.13 **	.07
R^2		0.30 **	0.14 **	0.16 **	0.37 **

注）** p<.01、* p<.05

Table 11 ニート・ひきこもり経験者における重回帰分析結果（縦軸：独立変数、横軸：従属変数）

		短縮版孤独感尺度	SLSS	児童用対人不安傾向尺度	
尺度名	下位尺度	孤独感	生活満足度	否定的評価懸念	情動的反応性
母親版	見捨てられ不安	.40 **	-.40 **	.46 **	.50 **
ECR-RC9	親密性の回避	.10	-.38 **	.16	.19
児童期･思春期シャイネス尺度	シャイネス	.03	-.11	.10	.03
SW 尺度	SW	.69 **	-.07	.21	.29
R^2		0.49 **	0.21 **	0.16 *	0.22 *

注）** p<.01、* p<.05

さらに、アタッチメント、シャイネスや SW、孤独感・生活満足度、対人不安傾向における校種差（あるいは推移）を Figure 1～4 に示した。従来から指摘されていた通り、ニート・ひきこもり経験者は、他の群に比べて、生活満足度が低く、他指標が高い傾向にあった。

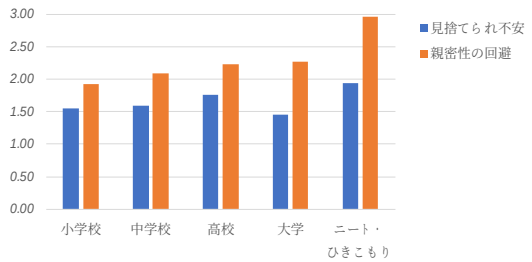

Figure 1 アタッチメント得点の推移

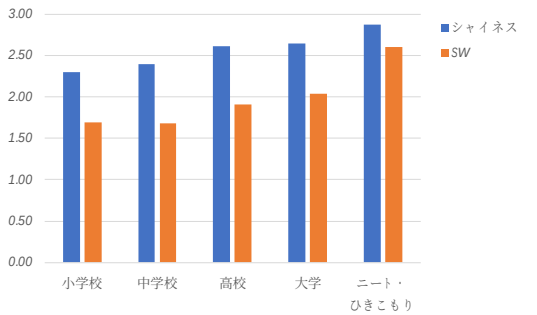

Figure 2 シャイネス、SWの推移

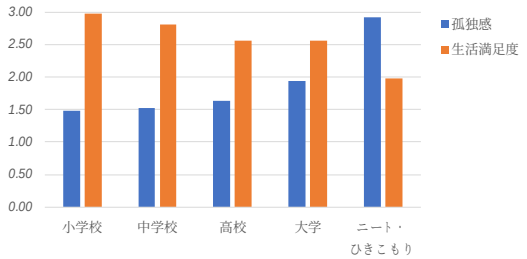

Figure 3 孤独感、生活満足度の推移

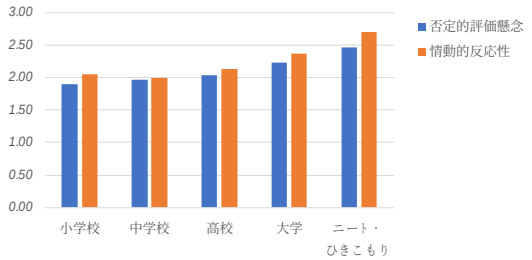

Figure 4 対人恐怖傾向の推移

ニート・ひきこもりに対する予防策について提言をして、本稿を締めたい（同様の論考は、中尾ほか，2012；中尾，2016）。アタッチメントあるいは関係性という視点からは、子どものどものシャイネスや SW には、子ども側の要因と、親側の要因の両者が、時間軸の流れに沿って相互規定的に影響を及ぼすと想定されている。

ニート・ひきこもりになるかもしれない子どもの特徴は、「いつもぐずぐずしている 2 歳児」「大変おとなしくて臆病な 4 歳児」「年齢より子どもっぽいわがままな言動をして仲間はずれになりがちな子」である。したがって、このような子どもに対して、何らかの社会的スキルのトレーニングを行うことは有効であると考えられる。

同時に、子どもが社会関係から撤退する過程には、親の養育態度・行動も大きく関わっている。たとえば、不安をあおったり、愛情の撤退をほのめかしたりして、親は子どもを心理的に支配しようとする。そうであるならば、できれば、2 歳くらいまでに、生まれたときから臆病な気質を持つ赤ちゃんの養育者に対して何らかのペアレンティグトレーニングを行なうことや、保育所などである一定の時間を保育者や他の大人とその赤ちゃんが関わるという機会を持つことなどが重要である。親教育が難しいなら、親以外の大人による、安心をもたらす関わりの中で、社会関係から撤退しがちな子どもは、少しずつ社会的なスキルや対人関係のあり方を学びはじめることができる。

最後に、NPO 法人ニュースタート事務局関西主催のひきこもり勉強会に参加していて、高橋淳敏氏が言った「友達ができたら、ひきこもりはよくなる。でも、親は、友達は作ってあげられない」という言葉が今も心に残っ

ている。この言葉の中に、ニート・ひきこもり問題の本質があらわれていると思う。

＜主な引用文献＞

Achenbach, T. M. （1991）. *Manual for the Teacher's Report Form and 1991 Profile*. Burlington: University of Vermont, Department of Psychiatry.

Booth-LaForce, C., & Oxford, M.L. (2008). Trajectories of social withdrawal from grades 1 to 6: Prediction from early parenting, attachment, and temperament. *Developmental Psychology*, **44**, 1298-1313.

Capsi, A., Bem, D. J., & Elder, G. H. (1988). Moving away from the world: Lifecourse patterns of shy children. *Developmental Psychology*, **24**, 824-831.

藤岡久美子（2013）．友達と遊ばない子どもの発達 ： 幼児期児童期の引っ込み思案・非社会性研究の動向　山形大学紀要（教育科学），**15**，309-323.

Kerr, M., Lambert, W. W., & Bem, D. J. (1996). Life course sequelae of childhood shyness in Sweden: Comparison with the United States. *Developmental Psychology*, **32**, 110-1105.

Ladd, G. W., & Profilet, S. M. (1996) . The Child Behavior Scale: A teacher-report measure of young children's aggressive, withdrawn, and prosocial behaviors. *Developmental Psychology*, **32**, 1008-1024

中川泰彬・大坊郁夫（2013）．日本語 GHQ 精神的健康調査票手引＜増補版＞　日本文化科学社

中尾達馬（2016）．アタッチメントとひきこもり　教育と医学，761，82-88.

中尾達馬・加藤和生（2004）．“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究，**5**，19-27.

中尾達馬・数井みゆき・村上達也（2016）．簡易版児童用アタッチメント尺度（ECR-RC9）の作成（1）－因子構造および内的整合性の確認－　日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集，311.

中尾達馬・髙橋淳敏・数井みゆき（2012）．ニート・ひきこもりを考える　数井みゆき（編）　アタッチメントの実践と応用――医療・福祉・教育・司法現場からの報告　誠信書房　pp. 144-168.

Rubin, K. H., & Coplan, R. J. (2004). Pay attention to and not neglecting social withdrawal and social isolation. *Merrill-Palmer Quarterly*, **50**, 506-534.

Rubin, K. H., & Coplan, R. J. (2010). The development of shyness and social withdrawal. New York: Guilford Press.
（小野善郎（訳）（2013）.子どもの社会的ひきこもりとシャイネスの発達心理学　明石書店）

Rubin, K. H., Burgess, K. B., Kennedy, A. E., & Stewart, S. L. (2003). Social withdrawal in childhood. In E. J. Mesh & R. A. Barkley (Eds.), *Child psychopathology* (2nd ed., pp.372-406). New York: Guilford Press.

斎藤　環（1998）．社会的ひきこもり――終わらない思春期――　PHP 研究所

菅原健介（1998）．シャイネスにおける対人不安傾向と対人消極傾向　性格心理学研究，**7**，22-32.

菅原健介・酒井　厚・眞榮城和美・菅原ますみ・木島伸彦・詫摩武俊・天羽幸子（2000）．シャイネスの形成要因に関する人間行動遺伝学的研究－児童・思春期の双生児を対象とした検討（1）－　日本心理学会第 64 回大会発表論文集 103.

Teo, A. R. (2010). A new form of social withdrawal in Japan: A review of HIKIKOMORI. *International Journal of Social Psychiatry*, **56**, 178-185.

5．主な発表論文等

〔学会発表〕（計 3 件）

①中尾達馬（2016）．発達とアタッチメントから考える社会関係から撤退するプロセス－児童期を対象に－　九州心理学会第 77 回大会　2016 年 12 月 4 日　西南学院大学　福岡県福岡市

②中尾達馬（2015）.アタッチメントとシャイネスが孤独感や対人恐怖および精神的健康に与える影響　九州心理学会第 76 回大会　2015 年 11 月 15 日　大分県立芸術大学　大分県大分市

③中尾達馬（2014）．安定したアタッチメントは、キャリア発達の促進因となり得るのか？　日本発達心理学会第 25 回大会　2014 年 3 月 22 日　京都大学　京都府京都市発表論文集，584.

6．研究組織

(1)研究代表者

中尾　達馬（NAKAO, Tatsuma）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：40380662